烈祖成績

一

烈祖成績巻之一

起天文二十年終
永禄五年九月

神祖、姓は源氏、諱は家康、贈鎮守府将軍（贈……死後に与えられた官位・称号。）大炊助新田義重の裔孫（遠い子孫）なり。小名は竹千代。徳川二郎三郎と称す。（徳、旧は得と作（な）す、後に今の字に改む）又松平蔵人と称す。初名は元信。元康と改め後に今の名に改む。贈大納言廣忠公の子。所生（生みの親、母）水野氏（右衛門大夫忠政の女、慶長七年八月二十九日卒、法名蓉誉光岳智香、号は傳通院、諸書或は智香英誉と作す、蓉或は容と作す、今増上寺所蔵松平譜に従ふ）天文十一（1542）年壬寅十二月二十六日、参河岡崎城に生まる。（東照宮年譜・創業紀・家忠日記・徳川記・松栄紀事）酒井雅楽助正親胞刀（え）を操（と）り、石川安芸守清兼蟇目（ひきめ）を射る（刀・弓で産所の魔払いをする）（徳川歴代に云ふ、大久保新八郎胞刀を操り、安倍大蔵少輔蟇目を射ると。今家忠日記・松栄紀事に従ふ。正親、世に与四郎と称し、家次の孫清秀の子。清兼、右近忠輔の子）容貌端麗、高祖父長親公、之を見て悦びて曰はく「是の児必ず名を天下に揚げん」と。（松栄紀事）祖父清康公、世良田二郎三

郎と称す。将帥の器有り、隣敵を戡定（かんてい）（武力で平定）し疆場（きょう）（国境）を恢郭（かいかく）（拡張）す。

天文四年（1535）十二月、尾張森山に屯（兵をおく）す。安倍大蔵少輔定吉の子、彌七正豊、猜疑を以て遽起（きょき）（あわただしく挙兵）し公を弑（しい）す。植村新六持益 安倍家伝説に、定吉、正澄と作す。今参州和田妙圓寺過去帳に従ふ。松栄紀事持益、栄安と作す。近代諸士伝略に拠れば栄安は法名にして名に非ず。新六の名持益、今之に従ふ。植村、土岐氏の裔也、持益時に年十六 立ちどころに正豊を斬り之を殪（たお）す。

将佐岡崎に還軍す。廣忠公、幼名仙千代も亦た二郎三郎と称す（苦労して行き悩む）孤立無援。定吉、東條の持廣に依り今川上総介義元に属す。持廣、吉良氏の族持清の子、東條城主と為る。義元、上総介氏親の子、治部太輔。上総介を襲称す 公を岡崎に納むるを請ふ。義元諾す。

六年五月朔（ついたち）、遂に岡崎に還る。按ずるに、徳川歴代・年譜附尾、廣忠公伊勢に遜（のが）るるを以て、天文七年に係（か）け（関係づけ）十三歳時の事と為す。以て岡崎にる。十一年に係く。今増補追加家忠日記・松栄紀事に従ふ

臣按ずるに、其の子（正豊）、君を弑す。而るに其の父（定吉）、職に居ること自若た

り。人皆焉を疑ふ。是れ其の心を亮にせずして其の迹を論ずる者なり。初め内膳信定、清康公に罪せらる。織田信秀妻の兄なり。信秀同じく啗すに利を以てし（利を与えて味方につける）、公を図らしむ（清康公をあざむかせる）。信定欻ち（ふっと）君臣の義を忘れ、叔姪（叔父・甥）の好を棄つ。上野城に拠り以て信秀に応ず。公（清康）班師（出兵）し之（信定）を討たんと欲す。時に定吉の威権を嫉む者有り、信定と通謀すと流言す。定吉、其の事無くして誅せられ叛臣の名を蒙るを懼る。書を作し以て鬼神に質して（あかしをたてる）他に靡じと誓ふ。正豊に授けて曰はく「吾殺さるれば汝執政に就きて之を上れ」と。頃之営中の馬逸れ騒擾す。正豊躁妄し父殺さると意ふ。遽に公を弑す。正豊の屍を検するに及び、定吉の誓書を得る。諸将其の事を道閲・道忠二公に白す。清康公の祖父長親公は道閲と号し、父信忠公は道忠と号す。皆剃髪退隠し、参川に居る。此に至り＊猶存す二公其の無弐（忠心）を知り之を宥す。定吉の冤始めて雪がれたり。然るに定吉、其の子の逆を為すを患ひ自殺せんと欲す。蔵人信孝之を捉る。

既にして信定果たして岡崎を奪ふ。定吉、艱楚辛勤百折不回（何度失敗しても志を変えない）、嗣君を抱負し二州を周流す（広くめぐる）。＊狐偃・趙衰の忠有りて＊申包胥の義に愧ず。竟に能く嗣君を岡崎に納め、疆囲を往昔に復す。其の子を以て累と為さずして其の孫正就に至り、方面の寄を受け鈞衡（宰相）の任に居く。定吉の忠、久くして弥彰かなり。

十年、（廣忠公）参州刈屋城主水野右衛門大夫忠政の女を娶る。忠政、下野守某が子、初め下野守と称す

明年、神祖を生む。忠政卒す。其の子下野守信元、刈屋・緒川二城に拠る緒川、或は小川と作す、国音相通ず今川義元に背き、好を尾張古渡城主織田弾正忠信秀に結ぶ弾正忠信定が子。公（廣忠）、義元の力を以て岡崎に還るを得たり。故に信元と絶つ。離婚し以て嫌疑を避く。参河後風土記曰はく、夫人、嫉妬を以て出さると。按ずるに夫人賢明、母儀の徳有り。其説取るに足らず。今家忠日記・松栄紀事に従ふ再び田原城主戸田弾正少弼康光の女を娶る。康光、弾

正左衛門宗光四世孫左近政光の子

十四年三月、帳下の士（近習）巖松八彌酗酒（酒に狂う）、将に公を弑せんとし其の股を傷つける。公怒り抜刀し之を逐ふ。八彌出で走る。植村持益、適登城し之と橋上に遇ふ。相搏ち塹中に堕つ。松平蔵人信孝清康公の弟、廣忠公の叔父槍を提げ来る。持益に謂ひて曰はく「宜しく八彌を縦つべし、我之を刺殺せん」と。持益曰はく「八彌大逆なり。若し之を縦ち逸れ去らば悔何ぞ及ばん。宜しく我を併せ之を刺殺すべし」と。信孝猶予す。持益竟に八彌を殺し其の首を斬る。廣忠公、書を賜ひ其の忠勇を褒む。松栄紀事・年譜附尾並び云ふ、八彌隣敵の護る所と為り将に公を弑せんとすと。而して松栄紀事年月無し。但し云ふ、頃年徳川記・徳川歴代、年月を係（か）く、而して歴代叙事頗る詳し。今之に従ふ。八弥巖松氏の胄（ちゅう）、一目眇（びょう）故に時に人或は片目八弥と称す。又按ずるに松栄紀事、持益、家政と作す。家政、持益の子なり、而して八弥を殺す者実は持益なり。時に年二十六、今之を訂す

十六年、（織田）信秀墨を築き岡崎に逼る。其の子信廣信長公庶兄をして安祥に拠らし

む。岡崎四面敵を受く。勢甚だ危急なり。公、援を義元に乞ふ。義元将(まさ)に駿河・遠江の兵を発し之を救はんとす。而して質を公に徴(もと)む。公、已(や)むを得ず神祖を以て質と為す。時に年六歳。従者二十八人。陸は皆讐国(しゅうこく)、故に舟路を取り西郡より田原に至る。康光の子甚五郎創業記、弾正の子と作す。孫四郎、家忠日記・徳川記・徳川歴代並びて五郎兵衛と作す。按ずるに、戸田系図・諸士伝略、康光の子。孫四郎・五郎兵衛無くして甚五郎有り。名闕く。後に丹波守と称す。其妹の下注に云ふに廣忠卿室なりと。今之に拠る忠を信秀に通じ神祖を潮見坂に奪ふ。従兵金田某戦死す。甚五郎神祖を将(っ)れ古渡に至る。信秀に授けて曰はく「卿、参州を図らんと欲す。此を以て質と為すに過ぐる無し」と。信秀大いに悦び銭五百貫を以て之に酬(むく)ゆ。三河物語・松栄紀事、曰はく、青銅一千貫。創業記曰はく、二百貫。徳川歴代曰はく、永楽銭一百貫。諸説紛紜たり。家忠日記は但し云ふ、厚く之を賞すと。按ずるに、駿府記、神祖自ら言ふ「吾幼き時、又右衛門某有り、吾を銭五百貫に鬻ぐ(ひさぐ＝売る)」と。後藤少三郎面(むか)ひて神祖の話を聞くに此の如し。今之に従ふ。又右衛門蓋し戸田康光の家士なり熱田加藤図書家に幽亍(ゆうちょく)(軟禁)し、使を岡崎に遣して曰は

く「吾駿府の任子（大切な子）を得たり、卿（廣忠）義元に畔（そむ）け。而して吾と講和せば則ち任子を送還せん。然らざれば之を殺す」と。廣忠公曰はく「尾張参河、兵を構ふること多年。奸人、質を奪ひ以て奇貨と為す。吾が志に非ざるなり。義元と定約す、其の事甚だ重し。豈に一子を以て信義に易へんや。生殺（せいさつ）は卿意に在り、吾の知る所に非ざるなり」と。信秀之を聞き怒り神祖を萬松寺天王坊間に移し之を禁錮す。艱苦万状。所生水野氏、久松佐渡守俊勝（初め弥九郎と称す、肥後守定俊の子）に再醮（さいしょう）（再婚）す。尾州阿古居に在り、熱田と相近し。水野氏屢（しばしば）俊勝の家士平野久蔵・竹内久六郎を遣はし、其寒温を問ひ衣物を贈りて之を撫慰す。義元、廣忠公の言を聞き其の志に感じ、益（ます）之を議救す。

十七年三月、信秀兵を率ゐ安祥に至る。義元、臨済寺僧雪斎を以て（諸家伝に拠れば、大原崇孚、号雪斎。清見寺に住す。勇略有りて軍事に暁く、将兵屢功有り。或は云ふ、雪斎、義元の諸父（おじ）なり、義元之を畏憚す。雪斎死し、義元稍懈（ややおこたり）、軍政日に乱ると。按ずるに、彰考館雑録載す、義元、其の子

氏真を戒め書きて曰はく「余、父命を以て幼きより僧として禅徳寺黙堂和尚に就きて学ぶ。歴二十年、成す所無しと雖も其の志在る所、大原和尚の知る所なり」と。之に拠れば則ち其の説或は然るなり兵数千を将ゐ、朝比奈藤三郎泰能・岡部五郎兵衛長教を副と為し之を救はしむ。松栄紀事、泰能、将と為し、雪斎、軍監と為す。今家忠日記・徳川歴代・年譜附尾に従ふ。泰能、後に備中守と称す廣忠公、援軍と合ふ。信廣と小豆坂に戦ひ之を敗る。酒井正親、鎗を揮ひ突戦し信廣退奔す。援軍之を追ふ。信廣の兵津田孫三郎・織田造酒丞等七人還り闘ふ。衆之に乗じ競進す。大いに義元兵を敗る。我軍小林源之助・林藤五郎等戦死す。岡部長教、横より尾張軍を撃ち又之を敗る。信秀、信廣をして安祥城を守らしめて尾張に還る。援軍亦た駿河に還る。是の歳、信秀又兵七千余を率ゐ西野に出陣す。岡崎の兵、陣を張り相対す。信秀其の寡を侮り陣を柳河の地に進む。廣忠公、善く射つ者を選び雨射す。長坂血槍信政陣を陥し、槍を以て盾を衝く。従者曰はく「宜しく以て之を礑衝（とうしょう）す（ぽんと突く）べし」と。信政其の槍を倒し之を鎹（っ）く。岡崎の兵勢に乗り競進す。信

秀の兵大敗し単騎遁げ帰る。松栄紀事本書曰はく「信政、彦九郎と称す。戦毎に槍を血塗らざるは莫（な）し、清康公其の槍を見る毎に呼びて曰はく、血槍と。遂に以て称と為す」と。血槍、茶利国音相通ず。故に其子孫茶利九郎と称す

十八年三月三日、織田信秀卒す。其の子信長、其の衆を統領す。信長公、幼名吉法師、後に上総介と称す。従一位右大臣に至る岡崎の諸将、喪に因り之を伐たんと欲す。会（たまたま）廣忠公羅（羅）疾す。

六日薨（みまか）る。年二十四。創業記・三遠平均記、二十五と作す。三河物語二十三。今家忠日記・徳川記・松栄紀事・徳川家譜・大樹寺記・増上寺所蔵松平譜に従ふ。一説に或は二十九と作すは誤なり公、慈仁撫士（家臣に思いやりがある）、勇にして決機たり。然るに性猜忌多く衆親附せず。時に神祖甫八歳、熱田に在りて計（訃）を聞き哀毀（き）（歎き悲しんでやせる）殆ど成人の如し。人皆哀感す。松栄記事

臣按ずるに、岡崎の基業、厥（そ）の来たるや遠し。蓋し根本固まれば則ち枝葉茂り、淵源深ければ則ち洲流広し。親氏公以て世室の冑（ちゅう）（頭）親氏公、有親公の子、韜光晦迹（とうこうかいせき）（隠

れ住む）、参河に流寓す。仁怒（恕）（ゆるす）寛厚、邦人其の恵を懐（おも）ふ。竟に其の力を頼み、土地人民有るを得。※親公亦仁怒（恕）、武幹有り※親公、親氏公の子 克く衆庶を撫す。彊囲（きょうい）を開拓し岩津・岡崎二城を築く。而して岡崎に居る。雑録・駿参紀聞曰はく、岡崎城、宝徳元年大草西海始め築く所なり。旧称龍城。蓋し※親公修築して更に岡崎と称するなり 信光公をして岩津に居せしむ。信光公、※親公の第三子 信光公、智勇兼備、寛猛相済（そろう）、兼弱攻昧（弱きを合せ暗きを攻める）。基業始めて大なり。天の祐（たす）くる所、子孫蕃衍（増えて盛んだ）、所生の男女四十八人。別子支庶、割郡分邑、宗族蔚（うつ）（一団をなして並ぶ）として日に盛んなり。親忠公 信光公第三子 謀画周摯（し）（行き届く）、励精治を図り、能（よ）く信光公の教を守り、恒に以て衆を撫し務を為す。人に善くし宝と為す。絶甘分少、威恵并（並）行す。長親公 親忠公子 沈毅にして、権略有り。墜つる弗（な）き堂構なり。安祥の寡兵を以て今川氏親の多衆を破る。隣敵讐服（しょうふく）（懼れ服す）、威名大いに振ふ。皆寛簡に由り衆を馭し、徳沢広覃なり。唯だ信忠公長親公子日夜酣飲（かんいん）、軍政を恤（うれ）へず（気にしない）、拳

動、衆望を厭はず、宗族親しまず。勲旧（手柄のある古い家柄）猜懼（さいく）。幸ひにして長親公猶存す。将佐（将官とその下の武官）命（めい）を稟（う）け菟裘（ときゅう）（隠居地）を大浜に営ましむ。清康公（信忠公子）天資絶倫、勇略蓋世（がいせい）（気力雄大）、士心帰嚮（ききょう）（武士たちが心服する）、大いに先業を振はす。其の勢将に尾張の疆敵を攘斥し、京師に直進し将軍義晴公に謁見せんとす。一旦変起く。倉猝（そうそつ）（思いがけず）我師（軍）潜（ほろ）ぶ。廣忠公（清康公子）幼弱にして危きこと綴流（ていりゅう）（旗の垂れた部分、実権のない君主のたとえ）の如し。叔祖信定、竊（ひそか）に異国を蓄ふ（心に隠し持つ）。安倍定吉、公を抱き出奔す。援を今川義元に乞ひ、岡崎諸将大久保忠俊・八国府甚六・大原左近衛門等に通謀す。忠誠金石を貫き、義気天地を動かす。内外謀を合はせ公を岡崎に納む。公、軍事に暁暢（ぎょうちょう）す（よく通じている）。部伍（ぶご）整粛、克く先志を継ぐ。我が武維揚がる。不幸にして蚤世（そうせい）（若死）す。神祖幼くして質と為る。中路にして奪拘せらる。歯熟（年とる）に曰はく、伶仃単煢（れいていたんけい）（一人ぼっち）、百艱備掌なりと。諸将協謀し、僅（かつがつ）還城を得る。浹辰（しょうしん）（十二日間）ならずして又駿河に如（ゆ）く。義元

代はりて政を為し、参河を以て己が有となす。将士其の采邑（支配地）を褫はるゝを懼れ躬ら耒耜（鋤鍬）を執り田畝に服す。而して敢へて離叛の心を生ずること無し。勍動（強敵との戦い）有る毎に義元参河の兵を徴発し、以て先鋒と為す。将士其の敵に餌するを知りて敢へて辞避せず。控弦抗戈（弓刀で立ち向かう）、肝脳地に塗れ（むごたらしく殺される）て悔まず。者皆我が君の速かに岡崎に帰り祖先の墜緒（衰えた事業）を紹ぐを欲すればなり。＊小白の斉に入り、重耳の晋に還る、未だ喩と為すに足らず。苟しくも歴世の仁漸義摩、淪肌浹髄（仁義が身に沁みこみ善くなる）に非ざれば則ち烏んぞ能く此に至らんや。天其の忱を棐け竟に旧復を得。神祖の英略世を蓋ふ。寛仁大慶、櫛風沐雨（風雨にさらされ苦労する）、経略（天下を経営し四方を攻め取る）殆ど虚歳無し（休みなし）。青野原の師（いくさ）、大憝就戮（憤り殺す）、難波の戦、一挙大捷（勝）、将士帰心し天下景従（従って離れない）す。既にして偃武崇文（戦がすみ平和になり、文を尊ぶ）、四海寧謐（平和）。上は天子を尊び下は衆庶を撫し、遂に万世の基業を開

く。而して勲旧の裔世禄匹休す。豈に積徳累仁の効に非ざらんや。故に臣竊に其の根本を推し其の淵源を究め、以為く岡崎の基址殆ど周室と相類すと。周、大王より以来、世に仁徳を修め以て邦の基を立つ。岡崎の岐歯（子孫一族）に於けるや其れ殆ど庶機し。詩に曰はく、＊文王の孫子は本支百世なりと。凡そ周の士、亦た世に顕れずと。此の謂なり

岡崎の群臣国事を計議す。石川與七郎数正安芸守清兼孫。右近衛監忠成子。後称伯耆守本多肥後守忠直平八郎忠豊次子、忠高弟 天野甚右衛門繁昌等謂はく繁昌、三郎兵衛康景弟、父祖注下 「尾州と講和し蚤く竹千代君を迎へ岡崎に入るに如かず」と。石川清兼・酒井正親謂はく「今川義元、先君と輯睦（仲良くする）なりて且つ遠参の甲兵幾数万騎なり。其の勢疆大、義元に属し以て還り入るを図るに如かず」と。植村持益松栄紀事、作出羽守家政。拠諸士伝略。家政、天文十年生、此時僅九歳。持益天文二十一年戦死於沓懸。其為持益、明矣。故今訂之・鳥居伊賀守忠吉謂はく忠吉、源七郎忠明子 「尾州との講和、事速かに成すべしと雖も、

向(さき)に義元三州の兵を以て我を伐たば則ち勢当るべからず」と。議未だ決らず。義元（廣忠公の）計(訃)を聞て曰はく「信長、岡崎の質を将(ひき)る来攻せば、則ち将士望風（評判を聞き）降附し、参州皆敵と為る。此の大患有るなり。速かに備を為すべし」と。則ち朝比奈泰能・岡部長教等をして兵を卒(率)る、岡崎を守らしむ。国を挙げ義元に属す。諸将議して曰はく「安祥密かに岡崎に通ず。攻めて之を抜くに如かず」と。十九日、兵を発し、安祥を攻む。信廣堅守防戦す。本多平八郎忠高平八郎忠豊長子 前島傳二郎矢に中(あた)り死し、榊原藤兵衛戦死す。我が兵利無くして退く。乃ち駿府に告ぐ。義元重ねて駿遠二州の兵を発す。僧雪斎・朝比奈泰能・松井某等を以て将と為す。期以て仲冬、岡崎に至る。信長、義元の出兵するを聞き、安祥の兵寡く守り難きを慮り、兵を遣はし之を援く。雪斎謀りて曰はく「伏邀(ふくよう)（待ち伏せ）を援兵に設くれば則ち城兵当(まさ)に出(い)で救ふべし。我多兵以て夾撃すれば之を破るは必なり」と。

十一月八日、尾州の援兵将に安祥に入らんとす。伏兵遽起邀撃（にわかに起って迎え撃つ）す。城兵出で之を救ふ。駿河軍三面に夾撃す。岡崎の精兵松平玄蕃頭清善与二郎親善子、初襲称与二郎。世称竹谷家　松平主殿助伊忠伊忠、大炊助好景子。世称深溝家　・松平勘四郎信一信光公男孫、彦四郎利長子。後為伊豆守。世称藤井家　・松平右京松栄紀事、拠福釜松平系図。蓋三郎二郎親次也。称右京亮　・本多彦二郎廣孝彦三郎信重子。後為豊後守、更越前守　・小栗助兵衛・酒井左衛門尉忠次左衛門某子。幼名小平次。更小五郎。後為左衛門尉　石川清兼・石川彦二郎・村越平三郎・村越二郎八・米津藤蔵・本橋金五郎・天野繁昌・鳥居忠吉・大久保五郎右衛門忠勝等忠勝初称新八郎。父祖注下　五十二人、槍を揮ひ奮撃し衆軍競進す。信廣素驍勇（強くて勇ましい）なり。衆に先んじ力戦す。而れども寡、衆に敵する能はず。外郭遂に破らる。信廣究蹙（困ってちぢこまる）し、纔に牙城を保つのみなり。信長告を聞き急ぎ馳せ之を殺さんとす。鳴海に至り狼煙の起つを見る。城の陥るを疑ひ轡を按へ進まず。雪斎使を遣はし、信長に謂ひて曰はく「安祥既に破らる。信廣の命旦夕（危

急切迫）に在り。若し之を生かさんと欲せば、当に岡崎の質を以て之に易ふべし。然らずんば立ちどころに之を殺すべし」と。信長怒り答へず。将佐苦諫（かん）す（主君を諫める）。信長之に従ふ。雪斎、信廣を放還す。神祖遂に岡崎に還るを得。諸将、先君の志を継ぎ、神祖を義元に送り質と為す。岡崎に在ること纔かに十日、又駿府に赴く。酒井与四郎重忠雅楽頭正親子。後称河内守・天野三郎兵衛康景縫殿遠房孫。甚右衛門景恒子・平巖七之助親吉後称主計頭・阿倍善九郎正次・阿部新四郎・高力与左衛門清長備中守重長孫新三（ママ）安長子。後称河内守・内藤與兵衛・村越平三郎・江原孫三郎・古橋宗内・榊原平七郎・渥美太郎兵衛友勝・平巖新八郎・平巖善七郎・本橋金五郎・渡辺勘解由左衛門・渡辺甚平次・天野又五郎・石川彦二郎・石川内記・植村新六郎家政持益子。後称出羽守及び奴僕一百余人焉（これ）に従ふ。創業記・家忠日記・三河物語・徳川記。諸士姓名、拠松栄紀事○家忠日記・徳川歴代等諸書皆以抜安祥易質子。神祖之赴駿府、係本年二月、為廣忠公時事。松栄紀事、叙事甚詳。為十一月事。年譜・創業記・三遠平均記、亦係十一月。今従之義元、駿府宮崎に築館し之に居（お）く。

久島土佐守をして監護せしむ。資用菲薄（くらしの資用が少ない）、庖厨寒倹（食事が粗末）なり。鳥居忠吉、家素富饒、常に岡崎より金帛（金品）を奉り以て之に資す。松栄紀事○雑録駿参紀聞曰、神祖外祖母名萬、大河内左衛門佐元綱女、嫁水野忠政、生傳通院。水野氏為尼、号玉桂慈仙。在駿府少将町、構小庵居僧智短。神祖幼為質、在駿府、依慈仙尼、入僧庵。学書後創為華陽院。以智短為開祖山号玉桂寺。有神祖所親接、柑橘柿樹安慈仙尼牌。往年先臣大串元善、使于駿府面聞華陽院僧語。筆記之附以備攷

岡崎の宗族老臣皆義元の指麾を受く。義元、石川右近・安倍定吉を以て岡崎城代と為す。鳥居忠吉・松平三郎（二郎）右衛門重吉奉行と為す。松栄紀事、重吉信光公曽孫傳七郎重親子、世称能見家

諸将に謂ひて曰はく「竹千代尚幼し。軍国の政、我之に莅む（統括する）。当に年長く之に還るを待つべし」と。乃ち吏を遣はし賦税を斂む。将士其の食邑を失ふを懼る。神祖之を聞き遍く書を賜ひて曰はく「采地は一切先の考（評定）の時に異ならず」と。将士皆按（安）堵す。家忠日記・松栄紀事

天文二十年辛亥、神祖駿河に在り。年方に十歳。安倍河原に往き端午の石戦を観

る。一群は三百余人、一群は之に半ばなり。衆皆多群に就き之を観る。神祖僕に命じ寡群に就かしむ。従者怪しみて之を問ふ。神祖曰はく「多群特衆(ただおお)くして其の心一ならず。寡群寡を知る、勠(りく)(あわせる)力励勇。多群必ず敗るなり」と。果して其の言の如し。人皆驚異す。義元之を聞き喜びて曰はく「将門に将有りと謂ふべし」と。愈之(いよいよ)を器重すと。甲陽軍鑑、為神祖十三歳時事。今創業記・松栄紀事に従ふ

（天文）二十三年甲寅、神祖駿府に在り。是の歳始めて擐甲(かんこう)す（鎧甲をまとう）。創業記

弘治元年乙卯、神祖駿府に在り。今川義元、駿参二州の兵を発す。尾州蟹江城を攻め、以て織田信長を牽(ひ)く（誘い込む）。岡崎の兵、松平和泉守眞乗、前鋒を為す。眞乗、小名源次郎。称左近。信光公五世孫。和泉（守脱カ）親乗子。世称大給家。松栄紀事、作家乗。拠諸士伝略、家乗、真乗子。天正六年生。今訂之。家忠日記、作近乗。益誤 大久保新八郎忠俊宇都左衛門五郎忠茂子、初称五郎右衛門 其の弟甚四郎忠員 後称平右衛門 ・姪（ここでは甥）七郎右衛門忠世忠員長子 ・阿倍四郎五郎忠政大久保弥三郎忠久子、為安倍四郎兵衛定次養子 ・杉浦八郎五郎勝吉徳川歴代作鎮貞。

今従杉浦系譜　父子三人先登し槍を揮ひ力戦す。世に之を蟹江七本槍と謂ふ。家忠日記・松栄紀事○按ずるに、世に七本槍と称する者四つ、天文十七年参州小豆坂、天正十一年江州志津嶽、慶長五年信州上田、尾州蟹江と四つなり　・武井角左衛門・大橋新三郎戦死す。家忠日記・松栄紀事

（弘治）二年丙辰、神祖駿府に在り。

正月十五日首服を加ふ（元服加冠）。時に年十五。義元冠を加へ、関口刑部少輔親永髪を理（とゝの）ふ。年譜・徳川記・徳川歴代○一説に親永、氏縁と作す。松栄紀事義廣と作す。今上諸書に従ふ。紀事又云ふ、関口或は瀬名氏と称す、親永、義元妹夫、諸書或は姑夫と作す、未だ孰（いずれ）是（ぜ）なるかを知らず。徳川歴代曰はく瀬名と称す。関口新野三家曰はく、今川家一族衆之に拠れば則ち瀬名関口別の一家なり　徳川二郎三郎元信と称す。義元昏（婚）を議り親永の女を以て夫人と為す。礼成り（婚礼がととのい）参州の士駿府に至り之を賀す。家忠日記・年譜附尾、以納夫人係三年。三遠平均記作二年二月十三日。今従創業記・徳川歴代・徳川家譜・松栄紀事。但、諸書無月日故不記

二月二十日、松平右京亮義春初称甚太郎。長親公第四子、為東條城主。世称東條家　神祖に代はり

西参河譜弟（代）の士を牽ゐ、同州日近城を攻む。城主奥平久兵衛貞延拒戦す。貞延、徳川歴代作貞置、今従福釜松平系図 義春矢に中りて死す。神祖之を聞き涙を揮ひ嗟惜す。聞く者皆感動す。嗣子（あとつぎ）家忠尚幼し、亀千代と称す。家臣松井左近忠次松井金四郎某子 忠にして勇有り。且つ婚戚たり。故に忠次をして家忠を傅し其兵を領せしむ。数（しばしば）軍功有り年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事 是の歳福釜寨（とりで）を築く。酒井忠次をして之を守らしむ。大久保忠勝・渡邊八右衛門義綱源次有綱子、清兵衛長綱弟 筧助太夫正重清左衛門正治弟三子、図書重忠弟 ・杉浦勝吉・大原左近右衛門・阿部忠政・大久保次右衛門忠佐等 忠佐。忠員第二子。忠世弟 援兵と為す。信長の武将、柴田権六勝家 信長公家老。後為修理亮。領越前・荒川新八兵一千余騎を率ゐ来攻す。松栄紀事、作二千余騎。未知孰是。今従家忠日記 城兵力戦す。渡邊義綱、尾州の魁兵早川藤太を射殺す。大久保忠勝将に其の首を取らんとす。勝家槍を揮ひ忠勝を鏦（つ）く。阿部忠政、勝家を射、之を傷つく。其の兵（勝家の兵）来救ふ。之を扶け馬を上（たてまつ）る。忠勝其の馬を刺す。勝家僅かに免れて退く。

荒川新八、衆に先んじて進む。我が兵奮撃す。獲斬(くびき)ること数十人。新八、兵を斂(おさ)め尾州へ還る。家忠日記、係正月。創業記・年譜附尾・松栄紀事、不係月。今従之。○按ずるに、徳川歴代、松平三郎次郎親俊、福釜城を守る。酒井忠次・大久保忠勝等を遣はし之を援く。然れども福釜松平系図、親俊の下其の事を載せず。今家忠日記・松栄紀事に従ふ 参州の士柳原兵部、駿馬を上(たてまつ)る。嵐鹿毛と号す。神祖、之を大将軍＊源義輝に献ず。義輝悦び手書及び短刀を贈る。家忠日記・徳川歴代、係三年。今従松栄紀事 神祖、義元に請ひて曰はく「吾幼にして父母の邦を去り尾州・駿府に在り。多く年を歴(へ)る所先人の葬祭、孝を尽すこと能はず。願はくは郷里に還り墳墓を灑掃し、以て追慕の誠を仲せん」と。義元之を許す。是に至りて始て岡崎に還る。松栄紀事 義元、山田新左衛門をして牙城（本城・本丸）を守らしむ。神祖、之を避け羅城（大きい城の外郭）に居る。時の人其の識見（物事を識別し観察する能力）有るを美む。年譜附尾、按ずるに、本書三年と係く。然れども明年の春、神祖又駿河に往く。蓋し三年事と誤り為す。故に此に係く 勲旧譜弟(代)の将士歓呼拝趨す（お会いしに行く）。鳥居忠吉進み、神祖の手を握り

て曰はく「臣今老羸（老いさらばえる）戎（戦）間に駆馳すること能はず。故に多く倉庫を置き軍糧を貯ふ。願はくは吾が君、多士を豢養（取り込み養う）し威名を四方に振へ。臣残喘を保ち得て之に面見ゆれば則ち志願畢れり」と。因りて歔欷嗚咽す。神祖も亦た感動す。松栄紀事

臣按ずるに、参河に三譜弟（代）有り。一に曰はく岩津譜弟（代）、親氏公・豢親公・信光公三世功労の士是れなり。二に曰はく安祥譜弟（代）、親忠公・長親公二世開閲（闢カ）の家是れなり。三に曰はく岡崎譜弟（代）、清康公の武威を畏み、＊跂慕攀附する者是れなり。或は云ふ、安祥は山中岡崎之を謂ふと。三譜弟（代）其の説異なると雖も御譜弟（代）衆と通称す。＊胙之茅土、以て城と為す。猗矣盛んなるかな。

三年丁巳春、神祖又駿河に如く。元康と改名し蔵人と称す。年譜・松栄紀事。按ずるに、創業記二年と係くるは誤り。三遠平均記天文二十三年と作す。益々誤る。○徳川歴代曰はく、是の歳神君岡崎に還り、古老の話を聞く。清康公の智勇兼備之を慕ひ元康と改名すと。其の説拠有るに似たり。而して連書義元の汲引（登用

する）任官を以て蔵人に補せらると。按ずるに、永録九年神祖始めて任官、諸書言はざる所なり。作者の杜撰なるを疑ひ、故に取らず

永禄元年戊午、神祖駿府に在り。今川義元神祖に謂ひて曰はく「西参河は卿（神祖）の累世の所領なり。将士信長と与（かか）はる者多し。盍（なん）ぞ之を伐ち以て其の地を取らざる」と。神祖大いに悦び、二月駿府を発し岡崎に還る。宗族勲旧召さずして集まる。寺部城主鈴木日向守叛き織田信長に属す。故に先（まず）之を討つ。時に神祖年十七。酒井正親・石川清兼前鋒を為す。火を外郭に縦（はな）ち之を急攻す。城兵拒（ふせ）ぎ守る。本多作左衛門重次作左衛門重信子、襲称作左衛門及び弟久蔵重玄、先登す。重玄戦死す。松平重吉苦戦し創（きず）せらる。重吉の次子半弥之助重茂及び其の兵、名倉総助等も亦戦死す。我が兵死傷を顧みず奮撃し斬首すること百余級。日向守力屈し出で降る。義元、神祖の功を褒め佩刀を贈る。創業記・家忠日記・徳川歴代・松栄紀事・年譜附尾。日向守出降、拠徳川記 山中三百貫地を還給す。徳川記・徳川歴代・年譜附尾 信長の部将佐久間某廣瀬城に

拠る。我が兵之に進攻す。信長寨（とりで）を築き之を守る。大久保忠世敵兵津田兵庫を斬り首級を獲る。江原某、神戸甚七を斬る。敵遂に敗走す。我が兵大呼し城に逼（せま）る。松平清善、弟勘解由と衆を麾して曰はく「左右皆敵の寨（とりで）なり、深く進むべからず」と。兵を斂（あつ）めて退くこと十町ばかり、隊を厳（いまし）め（隊に用心させる）顧り視る。寺部鈴木氏（拠上文寺部城主鈴木日向守既降。此或其族乎。未詳）挙母板倉氏及び丹下中島等諸塞の出兵間を伺ひ、将に我軍を撃たんとす。石川清兼神祖に謂ひて曰はく「我君初めて出師す。両日の捷（かち）、慶び此に過ぐる無し。全勝の兵道なり」と。整旅して還る。（松栄紀事）神祖又駿府に如（ゆ）く。松平監物家次、品野城を守る。（家次、内膳信定孫、内膳正清定子）信長寨を築き之に逼る。日夜攻撃す。家次刀（カカ）を悉（つく）し拒守す。

三月七日夜、潜かに兵を出し寨を襲ふ。敵兵驚擾す（驚き騒ぐ）。家次進撃し隊将竹村孫七郎・磯田金平・戸崎平九郎・瀧山傳三郎等及び従兵五十余人を斬り首級を駿府に上（たてまつ）る。神君其の勇略を嘉ぶ。（家忠日記・松栄紀事○徳川歴代、監物家次、作松平勘四郎信一。家

忠日記亦云、一説信一。今拠桜井松平系図　是の歳挙母・梅坪・伊保等の城を攻む。水野信元と石瀬に戦ひ、渡邉半蔵守綱力戦し功有り。創業記・家忠日記・松栄紀事・徳川歴代・年譜附尾。守綱、源五左衛門高綱子、後更忠右衛門○三遠平均記、以攻寺部・挙母・梅坪等為弘治二年。神祖十五歳時事、皆係月日。本年既差、月日不足拠。今従上諸書

二年己未（永禄）、神祖駿府に在り。

三月、夫人関口氏長子竹千代を生む。年譜・家忠日記・徳川歴代・徳川家譜・松栄紀事　今川義元国富兵強、遠参の豪傑麾下に率属す（服従する）。岡崎の兵数捷（あまたかち）を告げ威名大いに振ふ。甲斐の武田信玄　左京大夫信虎子、名晴信、歴信濃守。大膳大夫。剃髪号信玄　相模北条氏康　新九郎長氏孫、左京大夫氏綱子。亦任左京大夫　各和好を求む。義元驕泰（驕りたかぶる）以て唾手と為し、以て天下を得べしとす。将に駿遠の兵を徴（あつ）め尾州に出撃せんとす。信長之を聞き城堡を築き要害を守る。水野帯刀・山口海老丞守孝徳川歴代作弘憲。今従南行雑録。其余、尾州諸将、歴代皆有名。杜撰、不足拠。故不取下效（照合）之　・柘植玄蕃をして丹下城に拠ら

しむ。佐久間右衛門尉信盛甚九郎盛光子、襲称甚九郎、任右衛門尉 其の弟左京亮親盛按ずるに、佐久間系図、信盛弟有久六郎盛重・大学と同名にして左京亮親盛無し。未詳 善照寺城に拠る。梶川平左衛門中島城に拠る。佐久間大学盛重弥太郎盛経子 丸根城に拠る。飯尾近江守定宗・其の子隠岐守信宗定宗、織田三郎敏宗子、信秀伯父、養於飯尾氏。家忠日記・松栄紀事近江作遠江。徳川歴代、子作弟。今拠織田家譜、訂之。・織田玄蕃、鷲津城に拠る。山口左馬助中村城に拠る。其の子九郎二郎鳴海城に拠る。家忠日記・松栄紀事。但書左馬助父子守中村・鳴海二城。而無子名。今拠織田本信長記○按ずるに、山口玄蕃允宗和弟（第カ）二子、左馬助弘定、慶長十九年大阪城に入り、以て叛く。名称偶同じ。豈に其の祖先ならんや。今考ふる所無し。左馬助信長に叛き大高・沓懸二城の守将を誘ひ、義元に属さしむ。義元、鵜殿長助・長持播州青蓮寺記云、長助、名長忠。今従年譜・三河物語・徳川代代記・徳川歴代・松栄紀事○長持、諸書或作長照誤。長照長持長子、藤太郎之名也 をして大高・沓懸二城を守らしめ、岡部長教をして鳴海城を守らしむ。是に先んじ義元の部将葛山播磨守徳川歴代、作備中勝吉。今従松栄紀事・三浦左馬助・飯尾豊前守・浅井小四郎、笠寺城に

拠り、尾州諸城を掎角（前後からの攻め陣）にす。大高城糧乏し。急を駿府に告ぐ。義元神祖をして糧を納めしむ。神祖時に年十八、英気方鋭。譜弟（第）の士、踊躍相従ひ幾（ほとん）ど一千騎に及ぶ。急ぎ進軍し大高に陣す。左右間を伺ひ、将に糧を納めんとす。信長出兵し鳴海海辺に城寨を詗察（けいさつ）す（さぐる）。我軍以為（おもえら）く、信長糧道に邀（よう）す（待ち受ける）と。鳥居四郎左衛門・内藤甚五左衛門義教拠寛永系図、四郎左衛門正成兄、称甚五左衛門、而無名。松栄紀事、名義教、豈正成之兄耶未詳・内藤四郎左衛門正成右京進義清孫、甚蔵某子・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎時勝・杉浦勝吉をして之を偵せしむ。義教・正成等皆曰はく「敵、兵を厳しくし我が糧道を絶つ」と。独り勝吉言ひて曰はく「敵、戦を欲せず。速かに糧を納むべし」と。義教・正成曰はく「子（し）敵の鋭気を見ずや。何ぞ之れ繆（あやまり）を言ふ」と。勝吉のみ曰はく「然らず、敵戦はんと欲せば則ち当（まさ）に山を下りて陣すべし。今我軍を見、陣を山上に還す。是れ我を避くるなり。納糧猶予すべからず」と。神祖、之を然りとす。急ぎ兵を遣はし寺部・梅坪二城に向かは

しむ。火を民屋に縦(はな)ちて、敵を誘ふ。鷲津・丸根二城烟を見、起(た)ち馳せ之を救ふ。間(すき)に乗じ糧を納む。此れ神祖の兵略の始なり。義元之を聞き大いに其の功に感ず。世に之を称へて曰はく「大高兵糧納め」と。三河物語、係元年、為神祖十七歳時事。徳川歴代、係三年、為十九歳時事。三遠平均記、係弘治三年。皆誤。今従創業記・家忠日記・松栄紀事・年譜附尾。清水権之助 大高城に在り、敵兵を撃ち功有り松栄紀事 信長兵を引き清洲に還る 拠信長譜。天文二十年、信長移居清洲城 神祖も亦た岡崎に還る。義元、神祖をして西参河の敵を撃たしむ。故に又出兵す。寺部・梅坪・挙母・伊保等の城を攻め、得る所の采地を戦功諸士に頒(わか)ち給ふ。衆咸(みな)悦び謂(おもえら)く「乃祖(だいそ)（祖父）清康公の英武に似る」と。創業記・家忠日記・松栄紀事・年譜附尾 是歳、神祖亦駿府に如く。創業記・家忠日記

臣按ずるに、世に神祖の将略と称するは二つ。曰はく大高兵糧納め、曰はく一宮後詰。然して敵の強弱其の勢侔(ひとし)からず。自(おの)ずから軽重の分有るは何ぞや織田信長公驍将（勇将）なり。其の鋒木（ほこさき）当り易し。故に岡崎諸将、糧を納む

る以て難と為す。独り杉浦勝吉のみ能く形勢を察す。而して神祖決幾(機)易(か)ふること掌を反すが如し。信長公、吾軍の厳整なるを見、士卒を損ふを慮ふ。故に糧道に邀(ま)たず。彼を知り己を知る。豈に徒(ただ)に驍勇のみならんや。他年神祖と講和の心、未だ必ずしも此に萌(きざ)さざるにあらざるなり。（未必不萌於此地＝ここに生まれていたのだ。）一宮（三河一宮）則ち是に異れり。今川氏直(眞)闇将なり。率兵一万余、参河を寇(あら)す（せめこむ）。其の半ばを以て一宮城を圍(かこ)む。神祖三千余の兵を以て之を救ふ。直ちに其の陣営を過ぐ。往きて復た反る。無人の地を践(ふ)むが如し。氏眞其の精鋭を畏れ敢へて交鋒せず。徒らに重兵を擁し、一矢をも放つ能はずして去る。雷霆(てい)（稲妻）の威、虎豹皆股戦(こせん)（おののく）す。苟しくも節制（厳しい規律）の兵を訓練するに非ずんば烏(いず)くんぞ能く此に至らんや。

三年庚申、神祖駿府に在り。

五月今川義元、兵四万余騎を将(ひき)る年譜・家定日記・信長譜・徳川記・東宮記・松栄記事。按ずるに三遠

平均記、義元兵二万。四万余騎と号する、其の実を得るかを疑ふ

十七日参州池鯉鮒に至る。神祖、兵を発し之に従ふ。

十八日（神祖）久松俊勝阿古居家に往き、所生水野氏に謁す。異父弟三郎太郎・源三郎・長福三人、側に侍す。神祖欣然として曰はく「吾れ兄弟寡し。汝が曹（ともがら）（おまえたち）姓氏と棣咢（ていがく）（庭梅＝兄弟仲が良い例え）の好を成し、参州に来たらしめ、以て創業の資と為さん」と。因りて名を賜ひ、三郎太郎、康元と曰ひ、後に因幡守と為す。源三郎、康俊と曰ひ、豊前守と為す。長福、定勝と曰ひ、隠岐守と為す。定勝、初名勝俊。松栄紀事、作義勝。今従久松系図・徳川歴代。康元、為関宿城主。康俊質于甲州。定勝、為桑名城主。皆在下文

皆松平氏を賜ふ。又其の家士平野久蔵・竹中久六郎を召し之を労（いたわ）る。俊勝大いに悦び眉尖刀（びせん）（中国の剣・日本の長刀状）海螺を献ず。徳川歴代以賜三子姓名、為納糧大高前事。今従家忠日記・松栄紀事

是の日、義元大高に至る。丸根・鷲津二城を抜き尾州に進入せんと欲す。神祖を

して丸根城を攻めしむ。守将佐久間盛重、急を信長に告ぐ。神祖一千余騎を分け三軍と為す。諸書不載兵戦、今拠三遠平均記 石川日向守家成に命じて曰はく 家成、清康兼弟二子、忠成弟「一軍は正兵と為す。直ちに進み之を撃て。一軍は游兵と為す。相幾(ちか)く横から撃て。一軍は麾下に獲(護)衛せよ」と。松平又七郎家廣 信光公玄孫、佐渡守親忠子、称内膳正、後為紀伊守、世称形原家 ・松平弥左衛門・松平伊忠等七十二人正兵と為る。松平勘解由左衛門康定 康定、蓋大炊助好景弟也。説在四年二月 ・松平清善・松平信一等五十五人游兵と為る。酒井忠次・酒井重忠・石川数正等四十九人麾下に護り、各兵衆を統べる。石川家成・酒井忠次三軍に号令す。松栄紀事

十九日黎明、丸根城を攻む。城兵開門し争ひて出づ。神祖之を望み見て曰はく「我多く彼寡し。当に堅守防戦すべきに、反して此に出で闘ひ決死一戦せんと欲するなるべし。浪戦(無駄な戦)すべからず。当に銃失を以て之に挑み間(すき)を伺ひ城を抜くべし」と。家成・忠次軍中に申しせしむるも、前鋒既に交はる。松平善四郎正親 信

光公五世孫、善兵衛三光子・松平荘右衛門重利二郎衛門重吉長子・高力新九郎重正備中守重長弟二子 筧又蔵正則等戦死す。正則、清左衛門正治弟二子、助太夫正重兄 神祖の麾衆進み闘ふ。麾下の壮子悉力奮撃す。高力清長・奥平九八郎貞能監物貞勝長子、後為美作守。 善く闘ひ功有り。遂に佐久間盛重を斬る。代々記・三遠平均記・三河物語並云、大学戦敗遁去。佐久間家譜曰、盛重放火焼城佯死（いつわり）脱去。家譜之説似可信、然其後不見盛重之所在。亦不足拠。今従創業記・徳川記・家忠日記・東宮記・松栄紀事・年譜附尾 我兵進みて旗を城上に竪つ。贄掃部氏信先登す。駿河別将朝比奈泰能、鷲津城を攻め之を抜き、守将飯尾定宗を斬る。義元以為く、大高は尾州の要衝なり。当に守将を選ぶべしと。左右皆曰はく「元□（康カ）丸根城を陥す。威名赫に著し。此人に過ぐる無し」と。義元之を然りとす。乃ち神祖をして大高城を守らしむ。義元、一朝、丸根・鷲津二城を抜く。其の心益驕る。敵の寨を按行し（調べる）以為く、蕞爾（小さい）の蟻蛭は一蹴して倒すべしと。前軍数百歩を距て桶峽に陣す。家忠日記・徳川記・松栄紀事・年譜附尾 信長清洲に在り。盛重の報を聞きて曰

はく「大学、我に先んずること一日。救はざるべからず」と。将佐諫めて曰はく「彼は衆(おお)く我は寡なし。城に拠り固守するに如かず」と。信長曰はく「敵今朝の捷(かち)に狃(な)れ士卒驕惰ならん。我笠寺より東し、善照寺城を過ぎ、義元の麾下を急撃せば則ち必ず大いに志を得ん。此れ不意を撃つの術なり」と。信長譜・徳川記・徳川歴代　梁田出羽守曰はく「此れ奇計なり、必ず大捷を得ん」と。松栄紀事　信長登時(とうじ)（その時すぐ）清洲を発す。従兵僅かに五騎。熱田に至る比(ころ)、二百を過ぎず織田本信長記　先(まず)熱田社に詣で戦勝を祷る。密かに祠官と謀り金革（剣と甲冑）を鳴らす。信長高声に衆に告げて曰はく「神殿金革の声有り、是れ神、我を助くるや、戦勝は必(ひつ)なり」と。衆皆踴躍し中島に至る。衆兵踵至(しょうし)す（続々と来る）。然るに来(未だカ)二千に満たず　松栄紀事○本書曰、信長発清州、従兵不過十騎。比至熱田、衆軍踵至。家忠日記曰、従兵三千余騎。織田本信長記、載五騎姓名。其余為得実。従之。

臣按ずるに、壬申の乱、吉野大将大伴吹負(ふけい)、高市・牟狭・村屋三神吉野を保祐

する憑語（お告げ）を伝播し、以て衆庶を励まし、士心を一にし、遂に天武帝をして簒奪せしめ、其の志の如くす。此れ吹負の将略（戦略）なり。斉の＊田単、神師を用ゐ、晋の＊李矩、子産神の教と称するの類の如し。古より皆此術を用ゐる。信長公のみ、豈に能く前古の事を知る者ならんや。特（た）だ英明の資を以て略を施す所同じ。期せずして然り。此れ其の将略、人に過ぐる者なり。

分けて二隊と為す。尾州の驍兵、佐佐隼人正・千秋新四郎・巖室長門守、必ず先登を志す。遥かに信長の旗旌（きせい）を見、進み、義元の前軍と闘ひ敗死す。前軍其首を進（たてまつ）る。義元益（ますます）驕り、備を設けず宴を山間に張る。大いに士卒を犒（ねぎら）ふ。時黒雲欻（くつ）（にわかに）起、大雨雷電、杳冥咫尺（ようめいしせき）を弁ぜず（暗く、すぐそばでもわからない）。信長之に乗じ旗を偃（ふ）せ鼓を臥せ潜かに義元の陣の後に出づ。令して曰はく「他陣に向かふ勿れ。必ず義元の麾下を撃て」と。闘士競進す。信長旗を揚げ急ぎ之を撃つ。前田又左衛門利家、年十八 利家、封加賀。秀吉公賜氏、称曰羽柴筑前守、以旗其功。至従二位権大納言、先臣城所友

仙曰、縫殿助家則子。系図作蔵人利昌子、誤 先登し級を獲り信長悦ぶ。梁田出羽守・織田造酒丞・林佐渡守通勝 林佐渡守通村孫、新左衛門通安子、初称新五郎、林氏、元稲葉氏也。中世分居濃州安八郎（郡）林邑。故称林氏 槍を揮ひ猝（すみや）かに至る。麾下驚擾す。義元幄（とばり）を出で之を戒む。服部小平太進み義元を擬（はか）る（狙う）。義元短刀を抜き其の膝を斫（き）る。毛利新介槍を以て義元を刺し、遂に其の首を獲る。駿兵大いに崩潰す。信長勝に乗じ追撃し、二千五百余級を斬首す。織田本信長記、作三千余級。今従家忠日記・徳川記・信長譜・松栄紀事 駿州の鋭兵三浦左馬助・斎藤掃部・庵原左近・庵原荘二郎・朝比奈主計（かずえ）・西郷内蔵助・冨塚修理 家忠日記、冨塚作倉塚、今従徳川記・松栄紀事 松平摂津守・冨永伯耆守・四宮右衛門・井伊信濃守直盛 宮内少輔直宗子 油井蔵人・松井兵部・松平治右衛門等六十余人戦死す。其の余の将士皆城を棄て走る。信長、兵を戢（おさ）め清洲に還る。家忠日記・徳川歴代・松栄紀事○家忠日記・徳川記並曰、義元之将岡部五郎兵衛長教鳴海城に在り、義元の隕命（いんめい＝命を落とす）を聞き、勇気撓（たわま）ず、固く守ること十余日。信長佐佐内蔵助成政をして之を攻めしむ。下らず。信長其の勇壮に感じ講和す。長教

之に従ふ。義元の首を得以て駿州に帰るを請ふ。信長之を授く。長教悦び城を出で去る。士卒に謂ひて曰はく、「吾城を守り敵を却くると雖も功を立てず。徒らに駿州に帰るは吾が志に非ず。敵大捷に誇り守禦の心懈く、其の不意に乗じ急ぎ之を襲撃せば、則ち敵の一城を抜くは甚だ易し。水野藤九郎信近守る所の参州刈谷城は我が帰路に在り。兵を発し襲い之を取るに如かず」と。衆之に従ふ。信近、信元の弟なり。駿兵の大敗を聞き、果たして守備を設けず。長教、夜伊賀の諜を遣ひ、城に潜入し放火す。城兵驚き騒ぐ。長教之を急攻す。信近戦死し、城陥落す。長教兵を引き駿府に還る。氏真書を援け其の忠勇を褒む。此の当時之戦争と雖も神祖之事に関係せず。故に于此に附す。

神祖大高城に在り、未だ其の事を聞かず。駿兵の城中に在る者報を聞き皆亡(に)げ去る。岡崎の将士議りて曰はく「駿兵皆城を棄て走る。我独り誰の為にか此の孤城を守らんや。全軍にて還るに若(し)かず」と。神祖曰はく「軍中訛言(かげん)(デマ)多し、須(すべから)く其の実を審(しら)べて去るべし。事若(も)し蹉跌(失敗)ならば必ず姍笑(さんしょう)(嘲笑)を受けん」と。時に水野信元緒川城に在り。其の舅甥の好(よしみ)有るを以て其の臣浅井六之助道忠をして義元の死を告げしめて曰はく「明日信長将に来攻せん。須く夜に乗じ速かに去るべ

し」と。神祖以為(おもえら)く「信元は舅氏なり。然れども信長に党(くみ)す。未だ軽信すべからず」と。人を遣はし探詞(たんけい)し（さぐる）、乃ち其の実を得。将佐皆速かに去るを勧む。神祖曰はく「闇夜に敗兵と雑糅(ざつじゅう)（交える）せば則ち必ず道路に迷はん。須く月出を持(待)ちて去るべし。敵若し来襲せば速かに一戦を決せよ」と。屹然として動かず。頃之(しばらくして)天霽(は)れ月出づ。乃ち道忠を以て郷導せしむ。軍を整へて還る。寇賊道を遮る。本多百助信俊 太郎左衛門重信孫、太郎左衛門某弟二子 屢(しばしば)跋馬し（あちこちさせる）之を射る。池鯉鮒駅に至り、刈屋の土寇千余人将に敗兵を邀たんとす。道忠前駆し大呼して曰はく「我刈屋の兵なり。侵掠すべからず」と。土寇之を聞き敢へて支吾に（手向かい）せず。道忠従ひて今村邑に至りて還る。後に其の功を賞し采地一百貫を賜ふ。年譜・創業記・三河物語・家忠日記・徳川記・東宮記・三遠平均記・徳川歴代・松栄紀事 神祖岡崎城に入らず。以為く「初め義元、軍を出し三浦・飯尾・岡部等をして岡崎城を守らしむ。未だ我を還すの意有らず。義元死すと雖も率意(卒)（急に）入城は義に非ざるなり」と。軍

を大樹寺に駐すること三日なり。（松栄紀事）義元戦死の地を過ぐること無く必ず下馬す。（中興源記。）其れ信義に篤きこと此類を率くなり。駿兵の岡崎城を守る者、義元の死を聞き皆出で走る。神祖曰はく「彼棄てなば則ち吾之を拾はん」と。

二十三日岡崎城に入る。神祖六歳岡崎を出で外に在ること十四年。初めて宗族を復旧するを得。勲旧老少歓呼す。士気大いに奮ふ。（三河物語・東宮記・代代記・松栄紀事。）参州の旧臣絡繹（らくえき）継至（次々来る）。然れども前に信長に属する者城に拠り降（くだ）らず。神祖兵を発し、挙母・梅坪二城を攻め又廣瀬城を攻む。城主三宅右衛門佐、拂楚阪に拠り、之を拒む。足立金弥鉛に中り斃（へい）す。前軍頗る沮（はば）まる。神祖躬（みずか）ら兵を操り衆を励ます。大森與八郎直ちに前（すす）み槍を揮ふ。衆復び競進す。城兵敗走す。北（に）ぐるを逐ひ、城下に至り大喊（鬨の声を上げる）して還る。信長、織田玄蕃信平をして沓懸城を守らしむ。神祖之を攻む。城下に放火して去る。信長援兵を出し之を躡（お）ふ。勢甚だ鋭なり。大久保忠教殿（しんがり）を為す。軍を全うして還る。信長、水野信元に命じ岡

崎を攻めしむ。神祖出兵し石瀬に戦ふ。松平信一・石川新九郎正徳・杉浦八十郎徳川記作八郎三郎、今従家忠日記・松栄紀事・鳥居四郎左衛門・大原左近右衛門・矢田作十郎・蜂谷半之丞・大久保忠俊・及び姪(おい)忠世・忠佐・高木九助廣正後任筑後守・大田甚四郎吉勝・松井忠次等槍を揮ひ力戦す。敵鳥銃を放ち松井忠次の眼に中る。忠次進撃し其の敵之を殪(たお)す。筧図書重忠助太夫正重兄、初称平三郎奮戦し重創を被(こうむ)る。特に書を賜ひ之を褒む。大久保喜六郎忠豊級を獲る。忠豊、忠俊第三子。松栄紀事、喜六作喜八、今拠諸士伝略訂之大岡助十郎忠次戦死す。

翌日又信元の兵と刈屋城外に戦ふ家忠日記・松栄紀事並云、俗呼此地曰十八町両家の士或は親族、或は朋友なり。故に互に相媿(は)ぢ力を竭(つく)し闘を交ふ。大久保忠勝及び弟忠豊・従父弟（父方の従弟）忠世・大田吉勝等斬り獲る功有り。杉浦八十郎・村越平三郎戦死す。両軍の戦疲れ兵を戢(おさ)めて退く。又寺部・挙母二城を攻め之を抜く。進み山中に至り、医王山の寨を攻む。久松俊勝先登す。敵兵槍を以て俊勝の肩を傷つく。

俊勝槍の幹を截断す。輒ち寨に入り火を縦つ。衆兵相踵競進し、遂に之を破る。岡崎の武威日熾月盛（日に日に盛んに）なり。西参河の豪傑帰降する者益多し。是の歳始めて東参河に出兵す。長澤鳥屋根城を攻む。守将糟屋善兵衛、城を出で防戦す。榊原弥兵衛忠政数群を挺き（さきがけする）進み闘ふ。神祖其の勇敢なるを褒め早之助と改称せしむ。人皆之を栄む。、年譜・創業記・三河物語・家忠日記・東宮記・三遠平均記・徳川歴代・松栄紀事○松栄紀事曰はく、早之助或は隼之助と称す。其の敵を撃つこと迅速にして隼の如きなりと言ふ。徳川記、此事を以て四年八月に係く。按ずるに、明年七月糟屋善兵衛、又長澤城に拠りて戦ふ。故以て錯誤するのみ。

（永禄）四年辛酉二年（月カ）、水野信元近邑を侵掠す。神祖、又出兵し石瀬に戦ふ。家忠日記係三年六月、命従松栄紀事石川数正、敵兵高木善二郎清秀と槍を接す。清秀、六郎左衛門宣元子、後称主水正、帰神祖在下文二人の知名の士、雌雄未だ決せず。我軍と緒川の兵と争戦方に酣なり。本多忠眞・植村荘右衛門正勝・松井忠次等各戦功有り。忠眞槍を接し

一日七次（回）創（き）られ猶闘ふ。人皆之を称む。敵兵終に敗走す。三河物語・松栄紀事並び云ふ、「忠眞槍を按じ第七次に及ぶ、敵皆敗走す。故に参河の人称めて曰はく、「六度半槍」と○家忠日記・三河物語・松栄紀事並び云ふ、「去年石瀬の戦に、緒川の兵、金鯉□（兜のルが金字）鍪を戴く者有り。矢田作十郎使を遣はし之を乞ふ。敵作十郎の勇敢を知り之を贈る。蜂屋半之丞強ひて之を乞ふ。作十郎之を与えて曰はく、「此首鎧に辱ずる勿れ」と。是の日半之丞之を戴き赴陣す。既にして石川数正先に接戦す。敵兵鬨（こう）（どっと声をあげる）笑す。故に半之丞之を恥ぢ、此の後戦毎に先登す 神祖兵を発し広瀬・伊保二城を攻む。板倉弾正重定、信長に党（くみ）す。中嶋郷に拠り村里を鈔略（かすめ取る）す。神祖、松平大炊助好景をして軍を将ゐ之を撃たしむ。好景初称又八郎、大炊助忠景孫。大炊助忠定子。襲称大炊助重定禦（ふせ）ぐ能（あた）はず岡城に退保す。神祖兵を進め之を攻む。重定東参河に奔る。神祖、好景の功を賞め中嶋・長良二郡を賜ふ。年譜・創業記・家忠日記・鵞峯文集・三州深溝本光寺碑・松栄紀事 是に先んじ吉良義安、東條持廣の養子と為る。義安左兵衛佐義堯弟二子、持廣持清子 東條城に在り。義安弟義諦西尾城に在り。年譜・寛永系図・松栄紀事、義諦作

義照。三遠平均記作義顕。与義諦国音皆同。今従三河物語・代々記・本光寺碑。他処或作義照誤 今川義元の子上総助氏真と親族として義安、清康公の女を娶り神祖の外戚と為る。故に氏真懐疑し、義安を駿州藪田邑に留む。松栄紀事。按ずるに、徳川系図、清康公の一女、始め松平上野介康高に嫁し、酒井忠次に再醮して其を言はず、義安に適(めあ)ふ。、松平家女子譜、清康公の女、常在院に在り。桂室栄。病を抱き三州山中に終ふ。豈に此の人か、未詳 義諦を東條に移し牛窪城主牧野新二郎成定をして 松栄紀事貞成と作す、八年九年牛窪城主牧野右馬允成定と書く。按ずるに、寛永系図、貞城(成カ)無くして右馬允成定有り、牛窪城主応に二人有べからず。蓋し新次郎、右馬允と更称して実は一人なり。今訂之 西尾城を守らしむ。将に岡崎を寇(せ)めんとす。祖(神)祖、兵を発し東條・西尾二城を攻む。松平好景及び弟康定、善く戦ひ功有り。家忠日記・松栄紀事、按ずるに、徳川系図・諸士伝略、好景の弟勘解由左衛門康定無し。而るに家忠日記、亦好景の弟と書く。好景、家忠の祖父なり。蓋し亦拠る所今之に従ふ 神祖岡崎に還る。段嶺・新城・武節三城の主菅沼小法師段嶺、或作田嶺・駄嶺。国音相通、小法師後称刑部 ・長篠主計・菅沼左衛門貞景・設楽越中守貞通・西郷弾正左衛門正勝弾正左衛門政守子 ・

菅沼新八定盈等　定盈織部定如子、後称織部正　氏眞に叛き岡崎に降る。　家忠日記・徳川歴代・松栄紀事○前車後語集曰はく、永禄の初め神祖、本多百助信俊を以て使と為し正勝に帰降を説く。正勝命を奉じ東三河の諸将を誘ふ。野田菅沼定盈・段嶺菅沼小法師・長篠菅沼貞景・設楽貞道等、神祖に帰す。之に拠り、諸将の帰附するは正勝の功なり。附し以て攷に備ふ　氏直（眞）弱闇にして三浦右衛門佐を嬖（あい）す。　甲陽軍鑑曰、武藤氏子、初称武藤新三郎。徳川歴代・松栄紀事曰、小原肥前守子、嗣今川老臣三浦二郎右衛門家、故冒三浦氏。今従之。徳川歴代又曰、名義鎮、未知是否　旧臣を疎斥し、日夜耽楽す。政事を怠り報讎（ほうしゅう）（あだ討ち）の志無し。讒を信じ屢（しばしば）神祖を弐（ふたごころ）有りと疑ふ。故に神祖之と絶たんと欲す。　参酌諸書大意　織田信長之を聞き以為く、神祖と講和し力を勠（あわ）せ、以て氏眞を撃たば則ち覇業成るべしと。時に水野信元刈屋より清洲に抵（いた）り信長に説きて曰はく「元□（康）吾が甥と雖も、氏眞を以ての故に数（しばしば）吾と闘ふ。而るに氏真の猜忌（そねみきらう）積り不相能（ママ）、氏眞之に憤り参河を滅ぼさんと欲す。元□（康）年少と雖へども天資勇武、決して款（かん）を納れず（本心から内通服従を申し出ることはしない）。元□（康）と講和するに如かず。美濃を経略し、

以て斎藤龍興を滅ぼさん」と。信長悦び將佐を召し謂ひて曰はく「我世岡崎と仇讎たり。数挑戦すると雖も勝敗未だ決せず。今岡崎と連和せんと欲す。我西方に征き、元□をして東方に征かしめば、則ち大いに志を得ん」と。乃ち滝川左近将監一益八郎一勝子、更称伊予守をして石川数正に和親を求めしむ。信元亦使を神祖に遣はし之を勧む。神祖、数正及び其の叔父家成・酒井忠次・酒井正親・本多廣孝・植村正勝・天野康景・高力清長等を召し之を議す。忠次曰はく「今一国の兵を以て氏眞・信長両将に敵せんと欲するは国家の計に非ざるなり。氏眞復讎の志無くして酒色に溺れ士卒を恤はず、其の亡ぶこと足を翹て待つべきなり（近いうちに実現するだろう）。信長と和親せば則ち保国の利此より善きは莫し」と。諸将皆曰はく「往年の義元以て廣忠公を扶助すると雖も、実は之を滅ぼさんと欲す。公幼くして質として駿府に在り。参河の賦税、義元皆之を収む。徴発有る毎に必ず参河の兵を以て先鋒と為し、其の死亡を顧みず。公成長するに及び、或は丸根の前駆として

或は大高の留守として、我をして難を犯し以て敵兵に餌せしむ。推ふに、義元の志、敵国と謂ふべし。与する国に非ざるなり」と。忠次是を議る。神祖之に頷きて曰はく「難に臨み、命を隕すは固より士の常然なり。吾が幼時譜第の士多く戦死す。是れ終身の憾みなり」と。因りて流涕凄楚（身にしみてつらく泣く）、諸将亦洒泣す。其の言に感じ（心打たれる）、乃ち数正をして一益に報せしむ。信長大いに悦び、執政林通勝及び一益を遣はし、数正及び高力清長に鳴海にて会はしめ、尾参の国界を定む。丹下・鳴海・沓懸・広瀬・挙母・梅坪・大高・刈屋・岡・寺部・長沢・鳥屋根等の戍（まもる）兵を収め清州に還り、城寨を岡崎に属さしむ。神祖、植村正勝をして信長に与し平らぐを守城の諸将に告げしむ。酒井将監忠賀（左衛門某子、忠次姪。按忠次父祖及兄皆称左衛門。而系図失名、忠賀、忠次兄之子也。徳川歴代作忠尚。今従諸士伝略）上野城に在り。之を聞き岡崎に遽来して曰はく「信長、隣国として一旦之と和するは固より可なり。公（元康）必ず尾州に行き之に会ふこと勿れ。夫人・郎君駿府に在り。信長

必ずしも信ずべからず。請ふ、之を審図せよ（よく調べよ）」と。神祖曰はく「汝が言、固より善し。然れども既に信長と定約す。食言（約束を違える）は可ならず。須らく以て汝が駿府に置く所の質は吾が妻子と同じき生死なるべし」と。忠賀悦ばずして去る。鳥居元忠・本多廣孝・平巖親吉等進みて曰はく「将監必ず氏眞に応じて乱を為す。之を殺し以て後患を蠲くにしかず」と。神祖曰はく「将監の言亦無理に非ず、彼必ず反する能はず。之を舎し殺す勿れ」と。此に従ひ忠賀疾と称し、出でず。松栄紀事・徳川歴代　神祖使を清洲に遣し、信長と盟を約す。信長大いに悦ぶ。橋道を修し治具を張る（接待準備）。水野信元亦来会す。神祖、石川数正・其の叔父家成・酒井忠次・植村正勝・天野康景・高力清長等百余騎を率ゐ清州に如く。信長、林通勝・滝川一益・菅谷九右衛門等をして之を熱田に迎へしむ。神祖正満寺に憩ふ。少焉清洲に入る。観者城門に填咽す（充満する）。本多平八郎忠勝平八郎忠豊孫、忠高子。後任中務大輔、為桑名城主　時に年十四、眉尖刀（長刀様の刀）を揮ひ大呼して曰はく「参河の

元□(康)来たり。此汝曹(じょそう)（お前たち）何ぞ無礼の甚だしきや」と。衆皆跪伏(きふく)す（ひざまずく）。信長、神祖を羅城（大城の外郭）に迎へ牙城に延(ひき)入る。礼接敦篤(あつ)し。植村家政、神祖の刀を持ち近く坐る。衆之を呵(わら)ふ。家政曰はく「主人の佩刀を捧げ何の怪むことの有らんや」と。信長之を聞き衆に謂ひて曰はく「我久しく植村の名を聞く。汝輩（おまえたち）之を知らず。怪しむ勿れ」と。定に坐る。信長、神祖に謂ひて曰はく「和親既に成れり。善、是を踰ゆる莫し。当に水魚の歓（親交）を作すべし。両旗を以て天下を定めん」と。神祖拝謝す。其の盟書に曰はく「織田、天下の主と為(な)らば則ち徳川、幕下と為る。徳川、天下の主と為らば則ち織田、其の幕下と為る。斯の盟に違有らば明神之を殛(ころ)す」と。信長、厚く神祖を享(もてな)す。長光刀吉光の短刀を遺(遣カ)す。行光刀を植村家政に賜ひて曰はく「今日、子(し)の挙措を見るに勇気勃然たり（盛んだ）。＊樊噲の鴻門に在るが如し」と。礼し畢(おわんぬ)。神祖出づ。信長之を郊外に送る。通勝・一益・九右衛門をして之を熱田に送らしむ。神祖岡崎に還る。翌日信長、

通勝・九右衛門をして岡崎に往かしめ之に謝す。東宮記・三遠平均記・松栄紀事○松栄紀事、以神祖盟于清洲、為正月事。然前有石瀬之戦係二月。前後錯乱。胡不係月 氏眞、神祖の盟を出すを聞き大いに怒る。岡崎に使し之を切責（厳しくしかる）せしむ。酒井正親、成瀬藤五郎を駿府に遣はす。寵臣三浦右衛門佐に就き謝りて曰はく「寡君（我が君・神祖）既に妻孥（妻子）を以て質と為す。豈に敢へて携貳（仲たがい）を懐はんや。信長の勢ひ日に彊大にして岡崎を滅ぼさんと欲す。之と佯和（いつわりの和）せずんば則ち朝夕を保ち難し。此れ敵を誘ふの謀なりて実然に非ざる者なり」と。氏眞聞きて意に解す。家忠日記・三遠平均記・松栄紀事。吉良義諦、東條に拠り氏眞に党す。松平好景数之と戦ふ。好景の弟康康（衍字）定力戦し功有り。食邑を賜ひ之を褒む。神祖、本多廣孝をして小牧の寨を守らしめ、小笠原三九郎をして糟塚の寨を守らしめ、松井忠次をして津平の寨を守らしむ。年譜、係三年。今従家忠日記。按徳川記係弘治二年誤。日に義諦と接戦す。酒井忠賀上野城に在り。義諦出兵し之を攻む。

四月十五日、松平伊忠、命を奉(う)け上野を敕(勅カ)はんとす。義諦、好景の分兵上野にありと聞き、中島城を襲ふ。時に好景深溝城に在り。中島に馳せ入り義諦と戦ひ之を破る。好景勝に乗じ北(に)ぐるを逐ふ。善明堤に至り獲斬(くびき)るもの頗る多し。義諦、好景の兵少なく後継無きを見、土呂城辺より悉兵にて来圍(きかこ)む。好景鋭を破り堅きを挫(くじ)く。縦横に馳せ突く。□(革扁に延字)絶鞍揺(革ひもが切れ鞍が安定しない)、下馬し歩戦す。兵敗れ之に死す。時に年四十四。松栄紀事曰、好景中敵兵尾崎修理之矢、創甚。山岡薬医来取其首。今従本光寺碑・諸士伝略 弟十郎左衛門忠次・太郎左衛門定清・久太夫景則・新八郎忠憲・孫十郎定政・松平内記・板倉八右衛門好重等三十余人皆戦死す。家忠日記・松栄紀事、無忠次・定政二人。今拠徳川家譜補之。好重、八右衛門頼重子 好景、信光公五世の孫、啻(ただ)に無事に長きのみに非ず。兼ねて倭歌を善くし文雅の士なり。人皆之を惜しむ。神祖、其の子伊忠を以て嗣と為し、深溝城に居(お)く。年譜・創業記・家忠日記・本光寺碑・松栄紀事 義諦の族荒川甲斐守頼持松栄紀事作義虎、今従原氏系図・徳川歴代 義諦と相善からず。酒井正親に就き降

を乞ふ。神祖之を聴く。頼持、正親を荒川城に迎へ、兵を合せ西尾城を攻む。牧野成定拒ぐ能はず。牛窪に退保す。正親、西尾城に入り将に東條を攻めんとす。義諦の武将冨永伴五郎、藤波畷（なわて）に陣し小牧寨を攻めんと欲す。本多廣孝、正親と兵を合せ防戦す。小笠原三九郎・松井忠次、糟塚津平寨を出で之を救ふ。成定の兵須瀬宮内進み正親を撃つ。正親槍を揮ひ縦（ほしいまま）に之を殺す。従兵をして其の首を取らしむ。冨永伴五郎満を引き（いっぱいに引き絞る）廣孝を射る。廣孝槍を以て伴五郎を刺し其の首を獲る。我が兵大久保大八郎・鳥居半六郎戦死す。義諦の隊将、衆に挺し進み闘ふ者有り。阿部忠政射て之を斃す。伴五郎、義諦の勇将なり。徳川記、以此戦係弘治二年九月日。伴五郎撃殺鳥居半六郎。大久保大八郎進撃伴五郎。伴五郎斫（きる）之、大八郎捨刀相搏、竟獲其首。敵兵撃殺大八郎。与此異。今従三河物語・家忠日記・三遠平均記・松栄紀事。拠諸士伝略。伴五郎為本多廣孝所撃、明矣今に至り伴五郎の塚有り。人之を称ふ。諸士伝略其の戦死より義諦の兵撓（どう）（乱れる）敗し城に走り入る。我が兵塁壁を攀じ之を急攻す。義諦力尽きて降る。

神祖之をして岡崎に居せしむ。（きょ）按ずるに、年譜・創業記、西尾・東條二城攻、及び藤波畷の戦皆三年に係く。徳川歴代、弘治二年に係くるは誤り。今家忠日記・松栄紀事に従ふ。但し松栄紀事、誤りて九月の事と為す。家士（ママ）日記に拠り之を訂す。徳川歴代又云ふ、伴五郎、名は元忠。未だ是否を知らず

六月、神祖、正親の功を賞め西尾城を賜ふ。神祖城を群臣に賜ふこと、是れ其の始めたり。按ずるに、年譜荒川頼時を以て吉良義諦に叛す。酒井正親西尾城を襲ふ。西尾城を正親に賜ふ。義諦帰降す、皆五年に係く。今家忠日記・松栄紀事に従ふ 冨永伴五郎の采邑を本多廣孝に、津平邑（むら）を松井忠次に給ふ。各書を賜ひ之を褒む。家忠日記・松栄紀事 鳥居忠吉・松平信一をして東條城を守らしむ。荒川頼持の功を賞め神祖の異母妹を以て之に嫁（とつ）がしむ。家忠日記・松栄紀事。按ずるに、異母妹、廣忠公継室戸田氏の所生なり。後に市場殿と称す。徳川家譜、神祖同母妹と為すは誤り。今松栄紀事及び雑録に従ふ

七月、神祖、牛窪を攻めんと欲し、設楽甚三郎をして之の備を為さしむ。甚三郎、後称摂津守。按ずるに、慶長十九年大坂の役、台徳公前鋒す、設楽甚三郎貞光有り。蓋し此子孫なり。未詳 氏眞の

別将糟屋善兵衛・小原藤十郎 年譜・家忠日記・松栄紀事、作藤五郎。今従創業記・徳川記・徳川歴代。又云藤十郎名鎮吉、備前守鎮実子。未知是否、附以備攷 長沢城に拠り近邑を剽(かす)め掠(と)る。神祖、松平信一・石川家成をして之を攻めしむ。克(あたは)ず。親将（親衛隊）三千余騎牛窪を攻む。帰りに長沢を過ぐ。士卒に令して曰はく「長沢の城兵我が帰途を邀(おそ)はば則ち山路嶮岨なりて進退に拠を失ふ。宜しく兵を分け二隊と為し、一隊は山下の大路を過ぎ、一隊は我麾下に属し山の南を過ぐべし」と。時に長沢城火中す。山下の兵之を望み見て謂ふ、山南の兵城を抜き縦(放)火すと。急ぎ馳せ登る。麾下兵亦た競進す。隊を西し一に勢を合はせ当るべからず。信一・家成亦謂ふ、神祖来援すと。先を争ひて進む。城兵恇(おそ)れ擾(さわ)ぎ悉く亡(に)げ去る。本多忠眞、敵を刺し之を斃(ころ)す。姪(おい)忠勝に命じ首を取らしむ。忠勝哂(わら)ひて曰はく「我豈に人力仮りて功を成さんや」と。進み敵一人を刺し其の首を獲る。渡辺守綱、藤十郎を撃ち之を斬る。徳川記曰、藤十郎棄城走。今従年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事。按三遠平均記、係八年誤 神祖之を褒めて曰はく「藤十

郎は今川家の驍兵、今汝之を撃つ。功莫大なり」と。（諸士伝略）善兵衛、城を棄て駿府に走る。城遂に陥つ。忠眞、忠勝の勇を神祖に白（もう）して曰はく「平八郎幼しと雖へども鋭気人に邁（す）ぐ。後に必ず名を成さん」と。神祖大いに悦ぶ。（三河物語・松栄紀事）

五年壬戌春、西参河粗（あらあら）平らぐ。神祖東参河を経略せんと欲す。氏眞の将鵜殿長持、西郡城に拠る。（神祖）松井忠次をして之を図らしむ。忠次、従士石原三郎左衛門及び伊賀諜（ちょう）伴中務・伴太郎左衛門と謀り、甲賀諜十八人を招く。

三月十五日夜、中務と西郡城に潜入し長持を刺殺す。長子藤太郎長照・次子藤三郎を擒（とら）へて城を火（や）く。神祖兵を進め之に応ず。守兵潰走し城陥つ。（神祖）久松俊勝をして之を守らしむ。西郡要害の地たり。氏真数（しばしば）出兵し之を争ふ。俊勝、城に拠り之を拒ぐ。既にして俊勝岡崎に還る。神祖の出師する毎に留守を為す。長子康元をして西郡城を守らしむ。是に先んじ、氏真、神祖の任子を殺さんと欲す。然れども其の外祖関口親永豪族たるを以て止む。石川数正以為（おもえら）く、郎君（若殿）の駿府

に在る勢甚だ危殆(きたい)なり（非常に危ない）。一朝殺されて一(ひとり)として士人の殉死する無からん。是れ邦の辱なり。之を告ぐるも神祖必ず聴かれずと。乃ち書に留め家に已(お)く。竊(ひそ)かに駿河に往き公子を保護す。氏眞の、長照兄弟執(と)らはるゝを憂ふるを聞き、親永に就きて之を謀る。質を易ふるを議す。氏眞之を詐(ママ 許カ)（いつわ）る。数正岡崎に帰り其の状を言ふ。神祖大いに悦び長照兄弟を駿河に還し、氏眞、夫人・公子を岡崎に還す。数正意気揚揚として公子を雍樹（抱きかゝえる）して帰る。時の人之を壮とす（立派だと感心する）。譜弟(第)の将士皆念子原に往き之を迎ふ。持子公子に換ふ。我が福にして彼が禍なり。其の識無きこと知るべきなり。代代記・家忠日記・徳川記・徳川歴代・年譜附尾・松栄紀事

臣按ずるに、君子小人の由る所の判、唯だ義と利とに在るのみ。石川数正、駿府に往き公子と死を同じくせんと欲す。何ぞ其れ（何とまあ）義に喩(さと)くして為すに勇ならんや。豊臣秀吉公の軍、楽田に及び、啗(くら)はすに大利を以てす。数正、世

臣を以て（代々の功績有る家臣でありながら）主君に叛く。其の家（一族）を挈（たずさ）へて大阪に奔る。何ぞ其れ利に喩くして義に昧（くら）きや。秀吉公、虓（こう）（ほえる）虎雄武の士に乏しからず。豈に真に数正を我に臣とせんと欲する者ならんや。此れ特（ただ）浜松を弱めんと欲するの謀にして其の本心に非ざるなり。数正貪惏（どんらん）（むさぼる）饜（あ）（＝あきる）く無く利を見義を忘る。既にして秀吉公、之に松本城を以て封ずと雖へども、徒（た）だ庸（よう）を以て之を流遇するのみ（やといとして仮に待遇しただけだ）当時大坂の士大夫亦皆之を鄙（いや）しむ。井伊直政、大坂に使するに至り、数正と一諾（語カ）も交さず。衆に抗言し（きっぱりと言う）之を人面獣心と謂ふ。数正忸怩（じくじ）として対する能はず。誠之を失ふを患ふ。鄙しいかな夫れ。其の実を夷考するに、数正の驍勇群を逸（ぬ）き摧堅挫鋭（さいけんざえい）（強敵を破る）なり。然れども此れ皆血気の勇なりて義理の正を知る能はず。故に一旦憤激すれば君子の行有りと雖も終に小人と帰を同じくするを免ぜず。哀しいかな。

神祖既に氏眞と絶つ。氏眞怒り親永を殺す。神祖、酒井忠次を以て将と為す。八幡・牛窪を攻め、敵兵小阪井東岡に拠り之を拒ぐ。我が兵戦ひ疲れ将に退かんと

す。神祖一千余騎を率ゐ之を救ふ。敵兵潰走す。北(に)ぐるを逐(お)ひ多く首級を獲る。火を縦ち八幡の人家を焚(や)く。渡邉守綱力戦し将に退かんとす。近藤傳二郎重創をうけ歩む能はず、守綱を呼ぶ。守綱之を肩(かつ)ぎて帰る。松栄紀事・諸士伝略 諸将、神祖に言ひて曰はく「図らずも今日援けらる」と。神祖曰はく「吾佐脇の敵を撃たんと欲し出兵し、小坂井に戦闘有りと聞きて来り進む。予め料る所に非ざるなり」と。

松栄紀事

三月、井伊谷の城主井伊肥後守直親の家士小野但馬直親、信濃守直盛子 直親を今川氏眞に讒りて曰はく「直親謀反し竊かに岡崎に通ず」と。氏眞怒り兵を発し直親を討たんと欲す。氏眞の族新野左馬助新野、今川氏三家之一。説見上。徳川歴代日、左馬助名親規。未知是否 直親と交り最も親し。氏直(眞)を諫めて曰はく「臣能く直親の為人(ひととなり)を知る。敢へて反する者に非ず。事覈(かく)実(調査)の若(ごと)からば則ち臣之を滅ぼさん」と。因りて使し之に詢(と)(問)はしむ。直親対へて曰はく「先人信濃守、故君の難に死す。信長は君父の讎

なり。豈に敢へて之に従はんや」と。左馬助、之を氏眞に白す。事遂に窾(あなあ)く。直親、駿府に往き其の事を分疏(そ)(いいわけ)せんと欲して多兵、上を犯すが似(ごと)きを憚る。従者僅かに二十余人、途に懸川城下を過ぐ。城主朝比奈泰能、直親の冤枉(えんおう)(無実の罪)既に雪(すす)がるゝを知らず。意ふに其れ駿府を襲ふなりと。三百余の兵を出し之を撃つ。事不意に出づ。直親弁別する能はず。竟に戦死す。氏眞、曲直(正邪)の所在を知らず。其の采邑を没す(所領地を没収する)。直親、子有り。纔かに二歳なり。萬千代と称す。氏眞之を殺さんと欲す。左馬助之が為に命を請ふ。氏眞焉(これ)を聴く。左馬助悦び之を鞠育す(大切に養い育てる)。左馬助、引間に戦死するに及び、其の妻、孤児を撫育す。氏眞又之を殺さんと欲す。妻恐れ潜かに僧寺に送り之を匿す。妻再び松平源二郎に醮(とつ)ぎ、孤児を其の家に養ふ。兵部少輔直政是れなり。家忠日記・徳川記・徳川歴代・年譜附尾・松栄紀事 是に先んじ神祖駿府に寓居す。今川義元、岡崎将士の妻孥(ど)を取り質と為す。或は之を駿府に送り、或は之を吉田城に納む。神祖、氏眞と絶つ

に及び、将士皆質を棄て忠を神祖に竭(つく)す。吉田城主小原肥前守資良徳川歴代作鎮実。今従諸士伝略 将来を懲(こらし)めんが為、松平清善の女・松平家廣の少子及び菅沼定盈・西郷正勝・水野藤兵衛・大竹兵右衛門等の子姪弟妹十一人を捕へ、城下龍念寺前に串にし之を殺す。神祖之を聞き大いに悲慟す。家忠日記・徳川歴代・松栄紀事○諸士伝略曰、小原資良、串松平家廣第二子左近於形原前井尾浜、殺之。前軍（車カ）後語集曰、西郷正勝姪孫四郎、亦被甲而死。附以備考

臣按ずるに、徳川歴代は何人の撰ぶかを知らず。名を大須賀康高に託し（仮にする）口を極め当時の人物を臧否(そうひ)（良し悪し）し禍を避くるの計巧みなり。叙事詳しと雖も多く杜撰(ずさん)の説を率き憑拠(ひょうきょ)（よりどころ）足らず。唯だ其の論に、小原資良、岡崎の質を殺すとあり、甚だ機宜(きぎ)に適ふ（ちょうどよい）。其の言に曰はく「凡そ質を送る者携貳(けいじ)（仲たがい）を懐ふと雖も、主者其の質を殺すの理無く、之を生存させ之を撫育すれば、則ち敵割愛する能はずして終に我に帰する者有り。縱(も)し然る能

はざれば或は敵の為に我子弟を擒にされて質を易へ事を済す者有り。故に質は殺すべからず。此れ兵法なり」と。肥前守、兵を知らずして濫(みだ)りに之を殺す。之を殺すは甚だしと謂ふ。況んや其の惨虚を極むるをや。宜(むべ)なるかな、其の敗亡して首領を保つ能はざるなり。此論頗(すこぶ)る確かなり。故に此に著す。

七月、遠州嵩山城主奥山修理亮、氏眞に叛き岡崎・清洲に属す。氏眞、城を攻め、之を抜く。家忠日記・東宮記・松栄紀事

九月十一日、氏真、朝比奈紀伊守泰長に命じ松栄紀事無泰長之称、今拠前車後語集、書之西郷正勝を五本松城に夜襲せしむ。正勝戦ひ之に敗死す。前車後語集曰、従兵死者七十三人長子孫六元正、月谷城に在り。秦(ハタ)長の、父を襲ふを聞き五本松に馳せ至る。正勝既に戦死す。元正の従兵纔かに十余人。衆寡敵せず。亦戦死す。泰長又月谷城を抜く。元正の弟孫九郎清員後称左衛門執(とら)はれ万丈谷を過ぐ。敵の袪(そで)を執る所を奮ひ深谷

中に陥ちて遁る。野に至りて曰はく「従母弟菅沼定盈の家に往く」と。父兄皆死す　る

を告ぐ。定盈、之を神祖に白せば、即ち清員を召し正勝の采邑を賜ふ。清員謝して曰はく「元正孤有り。願はくは彼をして家を継がしめよ。然れども童稚く未だ軍旅を習はず。臣其の役を代はる」と。神祖之を義とし書を賜ひ之を褒む。按ずるに、家忠日記、元正戦死し弟清員馳せ正勝父子を救ふ。勠力（力をあわせる）駿府の兵を撃退すと。此説に拠れば、則ち正勝実は未だ死せず。然るに松栄紀事・前車後語集、叙事頗る詳し。今二書に従ふ○前車後語集曰はく、清員定盈に就き、正勝に元正敗死の状を白す。神祖使大須賀五郎兵衛・大須賀五六左衛門・本多信俊・植村家政・渡邊人左衛門茂・高井四郎左衛門をして清員の率ゐる兵と朝比奈𤇆長を撃たしめ、之を大破す。神祖、其の功を褒め、正勝の故邑を賜ふ。元正の孤子、義勝後に右京亮と称すと。皆他書の載せざる所なり。附以備攷

二十九日、神祖、又八幡を攻む。酒井忠次前鋒を為す。二連木・牛窪・佐脇・八幡の敵、赤坂に拠り之を拒ぐ。敵将板倉重定急ぎ進み闘ふ。我が兵多く死傷す。

重定勝に乗じ来り追ふ。渡邉守綱・石川上総・石川新七郎殿（しんがり）を為す。矢田作十郎、馬を失ひ敵の圍む所と為る。幾危（ほとんど危ういい）なり。守綱戦を留め之を救ふ。作十郎、馬を得て御油に帰る。赤坂に至り守綱轡を回す。敵凡そ十を攘（う）ち槍を接すること三たび。時の人其の勇敢なるを称へて曰はく「槍の半蔵なり」と。神祖、前軍の敗るるを聞き疾（と）く馳せ之を救ふ。重定、神祖の旌旗（せいき）を見、将に退かんとす。我が兵突戦す。近藤傳二郎、重定を撃ち其の首を獲る。重定の女壻（聟）板倉主水亦戦死す。敵兵潰走す。八幡・佐脇に入る能はずして皆牛窪・二連木に逃げ奔（かえ）る。故に八幡・佐脇二寨、一時悉く我が有と為（な）る。年譜・創業記・家忠日記・松栄紀事。按ずるに、三遠平均記、板倉重定を斬るを以て十一年事と為す。亦誤り